

ロンドン学派の言語学についての一考察

(1) 特に B. Malinowski と J. R. Firth について

小 迫 勝

序 説

L. Bloomfield の *Language* 1933 以来、記述言語学は、その研究対象を、話される言語に置き、書かれる言語の局面はその研究の対象とされてこなかった。ところが、現在、この点が反省されるようになった。殊に英国の「ロンドン学派」と呼ばれているグループでこの問題が取り上げられるようになった。このロンドン学派とは、J. R. Firth をその始祖とし、A. McIntosh や M. A. K. Halliday 等が活躍している英国で有力なる記述言語学の研究グループである。この学派の起源は1944年、J. R. Firth がロンドン大学の一般言語学の主任教授になった年とされる。

記述言語学において、書かれる言語をその研究対象としようとする傾向は、言語学的方法が文学に適用出来るか否かの模索に繋がる事にもなる。換言すれば、この傾向は、一面において伝統的な *philology* が新しい言語学の知識を取り入れ、一層の発展を遂げようとするものであるとも言い得るであろう。

この拙論も、文学と言語学（の方法）との接点を、文学のテキストを用いながら模索するという方向を目指すものである。この様な方向を目指す妥当性は、次に引用する Weinreich の言葉からも明らかな事と思われる。

There exists a fatal abyss between semantic theory and semantic description……, an abyss which dooms the former to emptiness and the latter to atomization.……a critical discussion……may help to put certain questions into researchable form.¹⁾

つまり、意味理論と意味論的記述の間には致命的な深淵がある。その深淵が存在する為に、意味理論は空虚に陥る運命を、意味論的記述は原子化する運命をたどっている。故に批評的に議論して、ある問題を探究の出来る形式に定めるようにと示唆している。換言すれば、記述する目的を離れて、理論的問題を求めてはならないという警告とも考え得る²⁾。かくして、前述の、文学と言語学の方法との接点を模索する基盤をロンドン学派の(記述)言語学の業績に求めようと思う。そこで、この拙論は、その模索の第一段階として、まずこの学派の始祖である J. R. Firth と、彼に影響を与えた人達、特に B. Malinowski の業績を跡づける事をその目的とする。I 章において、J. R. Firth に至るまでの史的意味論研究の一側面を概観し、II 章において、B. Malinowski の言語観、特に「意味」の考え方を跡づけ、III 章において、J. R. Firth が提示した言語学の輪郭を把握し、その「意味」の考え方を知る。

I

1.1. 近代意味論研究は M. Bréal に始まったといわれる。彼が1883年の“Intellectual Laws of Language” という論文で speech の形式的要素である音韻論、形態論の他に意味の科学が存在すべき事を主張し、その科学を la sémantique という語で呼ぶ事を提案した当時は、言語科学においては歴史的研究が盛んであったので、意味論もこの方向に従った。つまり当時の意味論研究は意味変化を enlargement (拡大), restriction (制限), generalization (一般化), specialization (特殊化), transference (転移), metaphor (隠喩), radiation (放射), irradiation (輻射), 等々の範疇に分類し、意味変化の傾向性、所謂 “semantic law” を発見する事であった。Bréalの本が1900年に Mrs. H. Cust によって、Semantics という題で出されるまで、意味の変化の史的的研究は、“Semasiology” と呼ばれていた。

1.2. この意味の諸研究に共通する事は、「意味」をいくつかの構成要素に分けて考えるという事であった。例えば、Trench は *English past and*

present において、「中心的又は、初期の意味」（ある語のあらゆる用法の中で最も共通の要素）と、「意味の範囲」又は、「適用の広がり」といった二義的な意味の概念を述べている。

Erdmann は *Die Bedeutung des Wortes* (1922) において、次の三種類の意味を区別する。(1) *Begriffsinhalt* (「概念内包」, *denotation* に相当する), (2) *Nebensinn* (「第二の意味」, 又は *contextual meaning*), (3) *Gefühlswert* (「感情価値」, 又は *feeling-tone*) である。

Ogden と Richards も *The Meaning of Meaning* の中で、“meaning” を *intention* (意向), *value* (価値), *referent* (指示物), *emotion* (情緒) といった構成要素に分析した。又, *situational meaning* を *referent*, *reference*, *symbol* の三つの術語に分析した。しかし、彼らにとって意味とは、事実や出来事と、それに対して言及する記号や単語との間の心 (*mind*) の中での関係である。*reference* なるものは、或いは, *referent* (*event*) と *symbol* (*word*) との関係は、思考又は心理的過程と見なされるのである。

1.3. 又、意味の変化を研究するに際して、三つの型の分類がよくなされてきた、つまり、論理的、心理学的、社会学的である。

Darmesteter は論理的な分類をし、Bréal は心理学的であったが変化の社会学的原因についても扱った。Meillet は社会学的傾向を示したが、全体を通して理論においてのみであった。より Firth に近くの人では、Sperber 博士は *Einführung in die Bedeutungslehre* において意味変化というよりもむしろ事物の変化の重要性を強調した。Wundt の意味変化の分類は心理学的で主に連想主義者の原理に基づいていた。

2.1. 以上の史的な意味変化の研究にたいするものとして、今世紀の初期、言語学界において、“copernican revolution” が起こった。つまり 1916 年、de Saussure の *Cours de Linguistique generale* が世に出た事である。所謂、記述的又は共時的の研究と、歴史的又は通時的の研究の明確な区別を立てるべき事を説き、共時的研究がまずなされるべき事を主張したのである。

Bréal が、史的意味変化を記述する為に、*sémantique* なる語を用いたので、Saussure は、社会の日常生活における記号や単語の用法や、機能を研究すべき、共時的（記述的）意味論を呼ぶために *sémiologie* なる語を示した。以上大変おおまかではあるが、古典的と言われる意味論研究をみてきた。

3.1. こういった歴史の流れの中であって、J. R. Firth は Saussure のいう「共時的」と「通時的」との対立 (*opposition*) は誤りであるという立場をとっている。J. R. Firth は、それまでの意味論の史的伝統との関係を絶ち、言語における形態と機能を研究する「非歴史的」(*non-historical*) なアプローチを試みている。しかしこの場合非歴史的とは言っても Saussure の通時的に対する共時的という用法と混同しないようにと付言している。

II

4.1. さて、次に語の意味を述べる基盤として、*Context of situation* なる概念を取り入れる事により、J. R. Firth に影響を与えた B. Malinowski の言語観、特に意味についての考え方について、まず調べてみたい。

当時英国は、H. Sweet などが、記録された死んだ言語ではなく、生きた言語現象の観察の必要性を説いていたが³⁾、Malinowski もこの流れの中であって、土人の言語の研究が特に必要であると考えた。

Malinowski は言葉の意味を述べるに際し、*situation, function, structure* なる概念を中心に据えているが、*situation* の初期の概念は、Wegener より得ており、*function* の概念を Sir R. Temple より得ている。

Malinowski は、*phonetics, phonology, grammar, stylistics* によって、言語的事実を述べる為の理論には殆んど貢献していない。彼の主なる興味は、Ogden と Richards の *The Meaning of Meaning* (1923) の *Supplement* に示しているように、意味の問題であった。そしてその問題を論じるにあたって Malinowski は Gardiner と同様に、Wegener の *si-*

tuation の理論を大いに利用した。つまり、彼は、原始言語学（土人の言語研究）に有益であり、且つ、人間の言語一般に対しても光を投ずるような意味理論を述べるにあたって、context of situation⁴⁾ の概念を使って、言語を、民族学的見地よりみたという事が出来よう⁵⁾。

4.2. そこで、Malinowski の考えをもっと詳しく見る前に Wegener の理論を簡単に述べておく。Wegener は situation に三つの型を設定する⁶⁾。

(a) 観察の situation (die Situation der Anschauung)

(b) 記憶の situation (die Situation der Erinnerung)

(c) 意識の situation (die situation des Bewusstseins)

(a) は、提示され観察される客観的な situation であり、(b) は、直ちに連想される記憶の要素又は要因であり、(c) は、特別の言語が、その意味を完成される心の situation（特に、自己の意識に関連するか或は、全ての関係者を個人的に同一視する意識に関連する situation）である。かくて、Wegener のいう situation は、あらゆる事実やデータの環境を作っている基盤（“basis”）なのである。そして人とその人に関連した対象が、存在する事が、上記の situations の中で環境を作っている必須の条件なのである。

こういった Wegener の分析は、ある点において、J. R. Firth の見解と接している。が Firth は Wegener のように、三つの situations は考えない。Firth の彼に対する批評によれば、意味を社会的、心理的な要因と関係づけようとする Wegener の初期の試みの主な弱点の一つは、context of situation の分析と、他のレベルの、例えば、文法的なレベルの分析とを混同している事であるという⁷⁾。こういった短所にも拘わらず、

Firth は次の点で Wegener を高く評価している。つまり、Context of situation が、言語と同様に、人や、対象や、その他非言語的事柄を包含する要素の、価値ある輪郭を提供し、それらの要素間で重要な関係が得られ、一組の functions を全体として構成するという事を、Wegener が認めていた事である。

4.3. ここで、我々は、Malinowski が、初めて彼の意味理論を明らかにした論文 “The Problem of Meaning in primitive Language”⁸⁾ を概観してみよう。

この論文の Part II において、彼は Trobriand Islands の言語を分析するに際し、単なる言語的手段によっただけでは、話の意味を明らかにする事は出来ない。発話の意味を明らかにする為には、言葉の他に、その言葉の話されている situation を知らなければならない、或は、言葉の話されている文化の環境の中に自己を置く必要のある事を述べている。例えば、自慢や競争の時の用語である kaymatana (frontwood) や ka'u'uya (rear-wood) なる語は、ただ英語に直訳しただけではどういった意味であるのか判らない。(これらの例では wood を canoe の意味に比喩的に使っている。) “front” とか、“leading canoe”、“rear-canoe”等の語の意味には、競争活動が部族の重要な要素である人々にとっては、特殊の情緒的色合いが添えられているのである。従って土人語の意味を全体的に把握する為には、部族の儀式生活、商売、企画等に際しての彼らの心理を背景として理解していなければ不可能であるという。要するに、Malinowski は、言語というものは、本質的に、(部族の)文化、生活、人々の慣習に根ざしており、言語は、発話のより広い context を絶えず考慮しなければ、説明され得ないと述べている。Malinowski は同じ論文の III で、context of situation の概念を導入している。つまり原始言語の “We paddle in place” にあたる表現は、context of situation の中に置かれて初めて、その意味が判るようになるという⁹⁾。著書などの書かれた言語は、読者にその意味を示すのに、言語だけで充分であるが、唯話されるだけの言葉では、その言語が話されている situation を抜きにしてその意味は判らない。話される言語は、語が話されている situation によくその意味を依存させ、語の economy が起こるのである。同じ論文の IV において、Malinowski は、民族学的背景は、一言語を科学的に扱う際に欠く事の出来ぬものではあるが、それで十分という訳ではなく、意味の問題はそれ自身の特別の理論を必要とすると述べている。そして民族学的パースペクテ

ィブと *context of situation* という概念を用いて、原始的な言語を研究する言語学に役立ち、且つ人間の言語に一般的に光を当てる事の出来る一つの意味理論の輪郭を与えようとしている。そして、発話の意味がいかにして決定されるかを、三つのはっきりと異なった型の *context of situation* の中に示そうと試みた。それらの *context of situation* とは、(1) *speech* が直接肉体的活動と関係する *situation*。(2) 語り (*narratives*) (3) *speech* がその空間を充たすために使われる *situations*, 謂わば、会話空間 (*a speech vacuum*) である。

(1) の場合は *speech* と共存する *context of situation* であり、その中で *speech* は行動の様式 (*a mode of behavior*) なのであり、思考の道具として使われているのではない。ここでは、Malinowski の次の洞察が伺える¹⁰⁾、つまり、単語の意味はその指示物 (*referents*) の物理的固有性によって与えられるのではなく、その機能 *function* によってであるという洞察である。そういった語の機能的意味を学ぶためには、その単語の示す *referent* が置かれる用法が、経験されなければならないという訳である。彼は、あらゆる単語は機能的に定義されるし、語だけでなく、言語におけるあらゆる可能な発話もそうであるし、更に意味は、実際の経験から学ばれるのであって説明とか、パラフレーズによって学ばれるものではないと主張している。

(2) の場合の *narratives* は、二つの *contexts of situation* と関わっている。つまり (イ) *narrative* の瞬間の *situation*, (この場合の *context of situation* は *speech* と共存している) と (ロ) *narrative* によって述べられた *situation* (この場合は、*speech* に後行する *context of situation*) である。ここで、Langendoen は、Malinowski の見落しを指摘している。つまり、*narrative* の中の *narrative*, 又その中の *narrative* というように無数に可能性のある *narrative* の創り出す *situation* といった方が正確であると¹¹⁾。そして又、この場合、(イ) の方に問題のある事を Langendoen は指摘する。つまり、(イ) の場合、Malinowski は、語りの瞬間の *context of situation* を、そこに居合わせている人それぞれの、社会

的、知的、情緒的態度によって作られるものとして定義している (p. 312) のだが、もしそうならば narrative の意味は、narrative の瞬間の context of situation と関わりを持つという事は、次の理由で明らかに意味をなさない。つまり、聴者の一人が眠っていたり、白日夢の最中である場合、どういった意味で、述べられた事柄の意味が、聴者の態度に依存しているのであろうかと批評している。

(3) の場合は、自由で、目的のない 社会的交わりを円滑なものにする為だけの、例えば挨拶のように、純粋な社交上の言語の用法が起る situation である。換言すれば、speech に先行する context of situation である。

4. 4. 次に、我々は、Malinowski の “Coral gardens and Their magic” (1935) という論文に触れなければならない。というのは、彼は、この論文において、今までみてきた “Problem of meaning” (1923) で明らかにされた意味理論に変更を加えているからである。つまり、彼は、context of situation について、「会話行為に共存するか、又は先行するか、或いは後行するかの人間活動の context を意味したのではなく、むしろ会話活動が埋め込まれている全文化的環境を意味した」のである。そして、この context of situation に対する変更された考え方は、後に Firth が採用した context of situation の概念と一致するものであるという点に関して、重要である。因に Langendoen は、Malinowski の言語についての、特に意味論についての見解が、J. R. Firth やロンドン学派に影響を与えたのは Coral Gardens に表明された見解だけであると極言している。¹²⁾

4. 5. Malinowski は、当代の英国の民族学者から「彼の抽象的な理論は死んでいる」という酷評を受けたり、Langendoen から、「発話の意味がとにかく、contexts of situation と関係しているという事を証明しそこなっている」¹³⁾等の批評を受けたり、texts を書き写す基盤になる phonetics のテクニックに欠けていた為、言語の音をある程度、「意味」と関連させる必要性を感じてはいたが、これらの点を分析する事が出来なかった等の事はあるけれども彼の長所も無視する事は出来ない。

4. 6. Malinowski の果した言語学への貢献は、次の4項目に要約出来ると J. R Firth は評価している¹⁴⁾。つまり

1. 一般理論、特に context of situation の概念と speech function の型という概念を使った事 (1953, 11, 53; 1923, 475-7)。

2. 単語の意味を述べるにあたって、文化的 context に関する定義に依った事。

3. 意味を翻訳 (translation) によって述べた事。

4. (i) 言語と文化; と (ii) 言語学と人類学との関係づけをした事。である。Malinowski と Firth との関係を見る為に、我々は、Firth による、上記4項目に関する見解を概観するのが便利と思われる。

1. に関して、Firth は次のようにいう。言語学における、situational なアプローチは、Wegener の1885年の著作に始まると考えられる。そしてこの Wegener の著作の長所は“realism” (实在論) の影響のない、一般理論的な抽象にある。Firth 自身が situational なアプローチを発展させたのもこの種のものであった、が Malinowski の著作には实在論的な影響がはっきりとみえるという。例えば、発話が“situation of action”の中に「直接に埋めこまれている」という Malinowski の表現の中には、発話が实在 (“reality”) を持っているという彼の考え方がうかがえるという。こういった实在論的考えの為、Malinowski はしばしば、理論的な構成物と経験の細目を、危険にも混合してしまうという失敗を犯している。Firth は、あくまでも situation の要因や要素は、text を含めて、経験からの抽象であるという。

2. の場合も、Malinowski の単語自体に対して实在論的な見方をする態度には不満を持っている。Firth に言わせれば、記述的言語学者は、“reality” (「实在」) などには関わらないというのである。

しかしながら、文化的な脈略に関わって、定義する事によって、語の意味を述べるという Malinowski の考え方から出てくる「辞書の虚構は、実際には有益であるが、理論的には危険である」という主張や、「多くの

辞書の形式は、定義の任意性や、引用の歴史的な価値に先取されているという理由で、すたれる方向にある」という主張に、Firth は同意している。

3. に関して、Firth は、Malinowski が「体系的翻訳」によって意味を述べる重要性をよく知っていた事を認めねばならないという。彼が註釈をつけた二重の翻訳によって意味を述べた事により、言語学において“translation meaning”「翻訳による意味」と呼ばれるものを注目の焦点に置く事となった。しかしながら、translation meaning それだけでは、いかに体系的であっても、言語学上の分析をする事は出来ない。これと関連して“use”「用法」と“mention”「陳述」の二つが適用されれば有益であろうと Firth は述べている。

4. Malinowski の 1915年より1942年までの間の著作の影響で、人類学者や言語学者が多く「民族学的分析と言語」を考えるようになった。そして1951年、International Council for Philosophy や Humanistic Studies of Unesco によって委員会が設置され、言語と文化の他の諸相との関係が調べられる事となった。

Firth は、“Ethnographic Analysis and Language”の結びに、民族学的分析と言語学的分析の二つのテクニックを分離させる必要を主張し、それと同時に、言語学において意味を述べる方向が全てのレベルにおいて、はっきりとするように、これら二つの分析の結果を互いに関係づける必要性もある事を主張している。

そして、Malinowski の言語学に対する顕著な貢献は、エキゾチックな言語と自国語における意味の問題に対して、context of situation 中の種々な speech functions の一般理論によって、アプローチした事であると評価している (p. 161)。

III

5.1. 我々は、II において、J. R. Firth に影響を与えた Malinowski の context of situation. 並びに、言語一般についての考え方をみてきたの

で、これから、英国における有力な記述言語学の研究グループであるロンドン学派の始祖 J. R. Firth の理論を跡づけてみよう。

5.2. Firth は “The Technique Of Semantics” (1935) という論文において、「古典的」意味論を概観して、「意味」というものがいかに **relation** として見られ、或いは **relation** の体系として考えられてきたかを指摘し、古典的史の意味論研究の特徴として、次の三点を強調している。第一は、史的原理と変化の研究が支配的であった事、第二は、第一に述べられた研究に際して、意味を **components** (構成要素) —— 例えば元来の意味、或いは最初の意味とか適用された意味、或いは変化された意味 (**Nebensinn**) といった要素 —— に分析し、それら相互の関係を論ずる事の必要性、第三に、変化の型の分類の必要性が説かれてきた点である。そしてその次に、変化の原因、変化の仕組み、或いは変化の程度や、ある変化の段階と次の段階との関係を論ずる問題がある事を指摘し、更には、それらと、実際の **context** との関係、特に型にはまった **context** や社会的背景との関係を明らかにする研究の必要性を強調して述べ、又、確証された音法則と、基礎の定まった **philological** な原理に従った形 (**form**) の変化の研究も並行して必要である事を指摘している。これは、語幹、語辞、複合語の形態論を含むものである。

5.3. 前にも述べたように **Ogden** と **Richards** にとって、「意味」とは事実や出来事と、それに対して言及する記号や単語との間の心の中での関係であったが、しかし、**Firth** は心については、我々は殆ど判らないし、又意味論の研究は本質的に社会的であるという事で、心と体、思考と単語といった二元論を重んじるのではなく、仲間との交わりのうちに、全体として考え、活動している全体的人間として把えるべき事を一いわば一元論を一主張する。かくして、**Firth** は、意味というのは、隠れた心理的過程における関係であるという **Ogden**, **Richards** には従わず、**situation** (場) における **situational relation** ¹⁵⁾ であり、更に詳しく言えば **context of situation** における他の要素と関連する行動の様式としての言語における **situational relation** をいうのである。

5.4. Firth も又、古典的意味論者達がしたように意味又は機能 (function) を構成要素に分離する。そして、それぞれに分離された意味、或いは機能は、ある context に関係するある言語形式又は要素の用法であるという。謂わば意味は、脈略的關係の複合体として見なされるべきであるとする。この複合体とは、Firth が言語学において既に立派に樹立されていた phonological, morphological, な context という考えに malinowski の context of situation の考えをつけ加えて、種々の contexts の配列と見なされてよい言語の一見解を案出したものである。そして、それぞれの contexts は、種々のレベルのそれぞれの要素や単位に対する環境 (environment) として役立っているのである。

Firthは、これらのレベルを、phonetic, lexical, morphological, syntactic, semantic のレベルと呼んだ。そしてこういったレベルにおけるそれぞれの要素を、彼は、phonemes, words, morphemes, syntactic categories, semantic categories と呼んだ。そして Firth は「意味」をあるレベルにおける要素とそのレベルにおける contexts との關係であると定義した。つまりいかなる文章の「意味」も次の五つの部分より成り立っている事になる。

まず第一が、それぞれの音素と音声上の contexts, つまり、それが一部分をなす語における他の音素との關係。例えば、頭文字の b と最尾辞の d という音聲的脈略 (contexts) において、16の母音の置換 (substitution) が可能である。つまり bi:d, bid, bed, bæd, ba:d, bə:d, bu:d, bʌd, bɔ:d, beid, boud, baid, baud, bɔid, biəd, bæədである。この16の母音のそれぞれの音聲的機能 (或いは意味) は他の15の母音と対比して使われる事である。そしてこういった用法は純粋に音聲的脈略の中において決定され、文法的な脈略とか、場の脈略とかは関与しない。第二が、それぞれの lexical item とその他の lexical item との關係。例えば、bɔ:d という形式又は語が、pɔ:t, bɔ:t, kɔ:d 等と異なったものである事を示す語彙上の機能。

第三が、それぞれの語の形態論上の關係。例えば、bɔ:d が名詞形では

なく、動詞の d-form であるとして脈略化したときに d のもつ機能。

第四は、統語上の機能である。例えば、bɔ:d/ とか、bɔ:d? 等と発音するとき、intonation が統語上持っている機能である、と Firth は言うのだが、Langendoen も言っているように、彼の統語 (syntax) についての考え方は、はっきりしていない。

第五は、文章の context of situation に対する関係である。例えば “bɔ:d?” と誰かが尋ねたとき、“not really” とか “no” 等と他の人が応えるときに、bɔ:d の持っている機能であるという。

以上述べた所から判るように、音韻論なくしては形態論は始まらないし、統語論も、抑揚 (音声学) なくしては不完全であり、記述的意味論も音声形式や抑揚形式なくしては不可能であると繰り返し述べている。

5.5. 又、Firth の “Ethnographic analysis and language” (1957, P.154) によれば、言語学者は、次の三つの種類の内部関係 “interior relations” を設定するという。

(a) The interior relations of elements of structure, words and other bits and pieces of the text. <構造の諸要素、種々の語や、text の他の一部分の内部関係>

(b) The interior relations of systems set up to give values to elements of structure and bits and pieces. <構造の諸要素や、text の他の一部分に価値を与えるために設定された種々の systems の内部関係>

(c) The interior relations of contexts of situation. <種々の場の脈略の内部関係>

今までみてきたように、Firth のいう意味論 (“semantics”) の中心的概念は context of situation であったが、上記 (C) の context of situation の内部関係は以下のように、“Personality and Language in Society, (1950, P182) , において要約されている。

1. The relevant features of participants : persons, personalities.
<関係者達、即ち人や人格に関連した諸特徴>

(a) The verbal action of the participants. <関係者達の言語行動>

(b) The non-verbal action of the participants <関係者達の非言語行動>

2. The relevant objects <関連した対象物>

3. The effect of the verbal action <言語行動の効果>

そして, situational なアプローチ, つまり意味論は, speech function の型を, 定型的 (typical) な context of situation に分類する事が必要であると Firth は考える。つまり彼は, 上記の context of situation と speech function の定型的な型という二つの概念が, 言語事象 (出来事) に適用されるべき schematic constructs (図式的構成物) として有益であると述べている。そして, これら二つの概念は grammatical な category とは異なるが, それと同様に, 抽象的な性質を持っているという。こういった試論の背後には, Speech は Johnson 博士のいうような「無限の混沌」(“boundless chaos”) ではないという考えが窺える。例えばある人が, 他の人に話しかけると, 話しかけられた人は, 比較的限定された contexts の中にあり, 何でも好きな事を言ってよいという訳ではない。つまり, Firth のいう contextual elimination が働く訳である。というのは, 我々個々人は, それぞれ社会的な役割を持っているからである。我々は種々の社会的役割, 例えば, 国家, クラス, 家族, 学校, クラブの一員として, 又息子, 兄弟, 恋人, 父, 労働者, ゴルファー, 新聞読者等々としての役割を持っているのであるが, これらの役割によって言語が特殊化してくると考える。そして “unity” というような概念は, 言語にはとうてい適用され得ないとしている。

5.6. Firth は contexts of situation の分類と記述の為に, 次のような基本的な categories を挙げている。つまり, speaking, hearing, writing, reading, familiar, colloquial, そして, より formal な speech, 学校の言語, 法律の, 教会の言語, そしてすべての特殊な speech の形式等である。以上の situation の型の他に, 「一人言」の用法とか, 親密さを増したり維持したりする時の用法 (これは malinowski が “phatic commun-

ion”と呼んだ situation) 等を加えている。かくして、Firth は言語とその働き方をよりよく理解する為に会話の研究の必要性を説いている。

5.7. しかしながら、ここにおいて、今まで述べてきた Firth の「意味論」は普通の意味の文章の意味とは何ら関係がないという事は明らかにしておかなければならない¹⁶⁾。この基本的に不十分な点は、ロンドン学派の後継者達によって認められている。例えば Palmer は種々の文体の speech を部類分けする目的以外は、定型的な context of situation の考え方は何ら言語的用途が無い事を指摘している¹⁸⁾。

5.8. Firth は1929年より1960年まで約30年間著作を続けているが、彼の後期の出版物は彼の初期の考えを繰り返したに過ぎないものが殆どである。そして彼の注目する所は特に音韻論と意味論であった。

しかるに、1951年の“modes of meaning”という論文では、意味の五つの次元の中の一つである lexical な次元（或いは様式 “mode”）が大きく注目された。つまりこの lexical なレベルにおいて “collocation” によって意味を述べて、ある語の “collocability” を調べるというテクニックを新たに提案したのである。彼の理論の根底には relation の概念が徹底しているのであってこの “collocation” の概念も、ある語とある語の結びつき方、或いは関係の仕方によって語の意味を述べようとするものである。例えば彼は、dark night という現代口語英語の連語によって、それぞれの語の意味は、他の語とつまり、dark は night と、又 night は dark と collocate し得るという事であるといっている訳であるが、collocation による単語又は lexis の意味は、あくまでもその語の部分的な意味ではあるが、それが全てではない事は直感によって知る事が出来る。例えば、white Christmas, blue Christmas という collocation があるが、Firth 流に言えば、white も、blue も共に Christmas と collocate しているという事で、部分的にこの二語は同じ意味を持っているという事になる。しかしあくまでも部分的な意味が同じなのであって、他の異なる部分の意味が述べられるためには唯これだけのテクニックだけでは不十分であろう。

5.9. Firth の, collocation の考え方に対する一, 二の批評をここで拾い上げ, Firth 以後の理論や方法の発展を今後見てゆく為の一つの目安としたい。

Langendoen は変形生成文法的な見地からの批評をしている。つまり, 「意味論の目標はむしろ dark night のような句の意味が, いかにしてこの句を構成する lexical items の意味の知識と, その句の内部に見られる統語的關係から決定されるかを示す事であるべきであろう。……句をなしている collocation によって lexical items の意味を決定しようとするどんな試みも, 言語の規則正しさ, 例えば名詞句の文法的構成といったものを利用する事ができず, それぞれの collocation に対して特別に意味を述べる事を余儀無くされる。」という。そして「Firth の collocation に関する提案は意味論というよりも文体論についての提案である。¹⁸⁾」と強調しているが, 一方, J. Lyons は Firth は絶えず “collocational level” は, grammatical level と situational level の中間的な level であるといっているのであるが, どのようにして collocation の概念が, 彼の一般理論に適合されるのか, 明瞭にさせていない」と指摘している¹⁹⁾。

あ と が き

以上, 「ロンドン学派」の出発点— J. R. Firth の受けた影響と彼の言語学の輪郭—をみてきた。そこでこれからの問題として, Firth 以後のこの学派の理論や方法の展開, 或いは, それらに対する批評等を跡づけてゆきたいと思う。特に McIntosh や Halliday, そして Lyons 等々の業績を中心に据えて論じてゆく事であろう。しかしながら, それと並行して, 序でも述べた如く, 文学のテキストを読みつつ, ロンドン学派の記述言語学の理論や方法と, 文学との謂わば接点なるものを探ってゆく事をこそ今後の本来の目標としたい。

1970年10月

NOTES

1. Weinreich, "On the Semantic Structure of Language", *Universals of Language*, ed. J. H. Greenberg. pp. 114-71, 1963.
2. G. N. Leech, *Towards a semantic Description of English*, Longmans, p. 3. 1969.
3. H. Sweet, Presidential Address to the Philological Society of Great Britain in 1887.
4. Malinowski のいう context of situation は Ogden と Richards のいう sign-situation と同等である。
B. Malinowski "The problem of meaning in primitive languages", (1923) *The first supplement to The Meaning of Meaning* by C. K. Ogden & I. A. Richards, Routledge, London, 1923. p. 308.
5. Malinowski が民族学的なパースペクティブにおいて言語を見、言語の意味を述べるにあたって、context of situation の概念を使うといった英国の伝統的な経験主義は、Vienna Circle にも影響を与え、Wittgenstein にもその echo がある。*Wittgenstein* は *Philosophical Investigation*, (1953) において「単語の意味はその用法にある」(p. 80), 「人はいかにして単語が機能するか推測出来ない。人は、その用法を見、それから単語の働きを学ばなければならない」(p. 109), 「言語は、規則や慣習のあるゲームである」(p. 47, 81) と述べている。Malinowski の "The problem of Meaning" という論文は、こういった関連において重要である。(p. 139)
6. Wegener, *Untersuchungen über die Grundfragen des Sprachlebens*, Halle, 1885, pp. 21-7
7. J. R. Firth, op. cit., p. 148.
8. Supplement to *The Meaning of Meaning* by C. K. Ogden and I. A. Richards, Routledge, London, 1923.
9. J. R. Firth によれば Malinowski 流の考え方は次のようになる。
"Malinowski regarded the context of situation as a sort of behavior matrix in which language had meaning, often a 'creative meaning' —
"A Synopsis of linguistic theory, 1930-55", p. 176.
10. Langendoen, op. cit., p. 22.
11. Ibid. p. 23.
12. Ibid. p. 35.
13. Langendoen, 1968. p. 24.
14. Firth, 1957. p. 153.
15. The relations between elements of linguistic structures of linguistic systems and non-verbal constituents of the situation are called 'situational

- relations', 'General linguistics and descriptive grammar', 1951. pp. 219-21, 227-8.
16. Langendoen, op. cit., p. 46.
 17. F. R. Palmer, "Linguistic Hierarchy", *Lingua*, 7, 1958, p. 237.
 18. Langendoen, op. cit., p. 64.
 19. J. Lyons, "Firth's theory of 'meaning'", *In Memory of J. R. Firth*, Longmans, 1966, p. 295.